

ウズベキスタンの金鉱床

＜石原舜三＞

ウズベキスタンの金鉱床には破碎帯型と多金属型、そしてポーフィリー型がある。破碎帯型が金・黄鉄鉱の単純な鉱物組合せを持つ深成鉱床であるのに対して、多金属型は金がTeと共生し、またSnを含む希産硫化鉱物を伴う火山性の鉱床である。ここでは代表的な例を示そう。

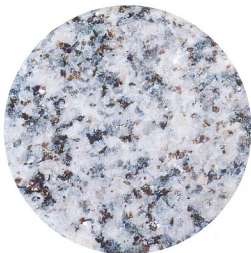
1. ムルンタウのオープン・ピット、Au2.8g/tの鉱石を1日約6万トン採掘している。



2. 鉱石のクローズ・アップ、離れると破碎した堆積岩に見えるが、近づくと珪化し硫化物が多いことが解る。左右8cm。



3. 巨大な規模を持つムルンタウ鉱床の鉱石処理場。



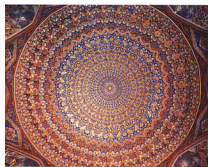
4. 鉱床の下部、4,250mで発見された両雲母花崗岩、チタン鉄鉱系、黒が黒雲母、褐色が白雲母、直径48mm。



5. アマンタイタウ鉱床付近の地表風景、遠くに竖坑、手前は探鉱地。



6. サマルカンドータシケントを通るシルクロードの近傍には15世紀頃より大々的に金の採掘が行われていた。金は主に装飾用に使われた。サマルカンドの1660年設立の神学校、ティラカリ・メドレセ(左)とドームの内部装飾(右)。塗装に3kgの金が使われたと言う。



7. コチャブラク多金属鉱床オープン・ビットに見られる縦(V)と横(H)脈の関係。ここでは鉱石は着かず、変質割れ目のみ産出。



8. コチャブラク多金属鉱床の高鉱部。ほぼ硫化物のみ、角礫構造が顕著な礫状鉱(左)と塊状鉱(右)。1,200m坑、57斜坑。



9. カルマキル ポーフイー銅鉱床のオープン・ビット、一日約7万トンの銅鉱石を採掘。

(関連：本文7ページ)